

第3分科会

北陸街道滑川宿における保存活用の活動、今後にむけ

富山支部 小森忠 永井康雄 富樫豊

1. はじめに 北陸街道の宿場町滑川宿には江戸末期から明治・昭和初期に築造の古い町家と寺院が多数現存している。これらについては文化的価値が高いとして2010年より「保存は活用あってのもの」という考えで保存・活用運動が始まり、滑川宿を息づかせる取り組みが継続されている。

本稿では、運動開始からの14年の運動成果をかみしめながら、この時期にこそ今後の運動の進め方・在り方について検討することにした。検討点は、スタッフの高齢化もあって、どう運動を支えていくか、市民への働きかけをどう進めていくのか、文化の香りの定着とともに市民への愛され方にも言及する。具体的には今抱えている問題ごとに考察する。

2. スタッフ高齢化検討 スタッフは、2010年代に壮年であっても今ではすっかり後期高齢者となったためか、各種行事にてディレクターに加え接客対応にも追われ、いつも疲労困憊である。スタッフの若返りに関して継続検討中。

3. イベント検討

3.1 ランタ祭り

2010年からのランタ祭りは、エキゾチックな風情が人気となって今ではしっかりと街に定着し、参加



者は期間中1万人を超える賑わいである。もちろん、地元の高校含めた各団体がテント張りの模擬店を出し、楽しんでいる。そんなランタ祭りでは、写真撮影のオプションも取り入れて規模が大きく、参加者も増え、運営側も大忙しである。もっと地域の方も運営側に入って欲しいとの声も聞かれるほどである。しかしながら、NPOの方も高齢化により活動が飽和気味である。今後どうするか、NPOでも検討している。

3.2 酒蔵アート 2014年から開催の「酒蔵アート in なめりかわ」は地元中心で二十数名の芸術家が滑川宿にて開催の美術展である。2024年の10周年を迎え、旧宮崎酒造の邸宅・酒蔵および有隣庵の邸宅において、写真、陶芸、裂織、造形、華、書、絵画、インスタレーションの分野の作品展示により、滑川宿が芸術の秋に相応しい賑わいとなっている。もとより、滑川宿の建物や街並みが文化を醸し出すだけに、美術展との協奏は大変素晴らしいことである。もちろん、文化財建物と美術作品の良き調和には、今後も継続して論議がなされている。



3.3 雛祭り 毎年恒例の雛祭りは大賑わいで皆さん満足して鑑賞されている。その一方、未だに家庭の押し入れにしまってお雛様を会場に飾ってとの声もあり、スタッフは困惑気味である。



3.4 大学生と地域との交流 山形大学生と地域の交流会として芋煮会が滑川宿旧宮崎酒造で開催。今年で10周年。若い方との交流はいつも賑わっている。今後も続けての声多数。

4. PR、来場者の呼びかけとして広報 イベント周知として地元新聞や地元広報誌の利用が効を奏している。



・地方新聞に掲載の開催記事が効果大である。雛祭り、ランタ祭り、酒蔵アートなど、開催期間が数日に及ぶイベントには効果的である。一日開催のイベントでは、開催記事は翌日紙掲載となるので、

集客にはつながらないが、こんなことがありましたということでは有難い限りである。なお、開催の事前告知には広告扱いとなるので、小規模団体には望むべくもない。

・滑川広報誌(市便り)については、有力なメディアとして、イベント開催の事前告知にはそれなりの効果がある。しかしながら、市便りをしっかりとみる方が少ないのが現状である。

5. 愛好ファン向きに 滑川宿をおもんばかる滑川宿愛好ファンについて；滑川宿ファンは全国におられるが、特に地元滑川の方にはいつも滑川宿を見守って欲しいし、また不特定のファンとして例え一見さんであっても滑川宿をしっかりと記憶していただいている。その楽しみ方としては、何かにつけ、滑川宿まで出向き、静寂な風景やイベント時の賑やかさを十分に堪能しておられよう。そうなると、滑川宿ファンを引き付けるコミュニケーションを図り、情報を提供することが不可欠といえ、このためのツールとしては会報、HP、FBがある。

会報は、これまで10年、11年、12年、15年、20年の5回発刊しているが、スタッフ側の問題で継続発刊が難しい状況にある。加えて不特定の滑川宿ファンへのサービスも実施困難である。

HPについてはNPO設立(2013年)と同時に開設され、大いに期待されていたが、これもまたスタッフ側の問題で細々運営である。しかも、HPは面倒として敬遠の憂き目にあっている。

FBについては、HPよりわずかに遅れて開設され、いまだに賑わいを見せている。最近ではInstagramやラインといったツールがあっても、FBは健在ぶりを発揮し、大きな役割を担っている。

6. 実績の記録および資産づくり 活動の仔細を記録し世に公表することは後世への資産づくりも考えている。その点、滑川宿の紹介パンフや会報も有力な資産の一つである。これに加えて、建築・まちづくり実務団体(新建築家技術者集団)には2012年以来今も隔年ごとに、また建築の学術団体には時折、レポートを提出している。なおレポートの内容は、滑川宿の建造物や風景の説明、人々との協働による賑わい創出、文化保存活動などの紹介である。多くの街づくり仲間と意見交換もさることながら、元気を互いに分かち合っている。

7. 学術的支援 滑川宿においても価値付けが必要として、2017年には宿場の10件の建物が登録有形文化財となり、合計で登録数は19件となった。一般の方々にとっては、文化財の価値を目の当たりにできるとあって、建物や風景を見る目がかわってきているものと思える。今後は、修理修復に大いに学術的対処が必要となる。

8. おわりに 街づくり活動を組織だって始めて14年、ここが一つの節目として過去の活動実績の重さをかみしめながら、今後に向けて、スタッフの高齢化、来訪者とのコミュニケーションの図り方などを検討した。これをもって活動の活力向上に繋げたい。**謝辞**；NPO各位に感謝します。